

編集後記

◇昨年秋に始まった世界金融危機について、私は10月頃まで身近な問題になるとは受け止めていなかった。しかし、月を追う毎に深刻な問題であることに気付く。いも類振興会は小さな財団法人である。その運営の主財源は、基本財産等の運用収入だ。それが今回の金融危機で大幅な収入減に見舞われ、その影響の大きさを痛感している。

◇本誌99号の企画段階では「特集」編成を特に意識していなかったが、結果として「暖地バレイショの現状と方向」となった。小村国則氏は昨年11月、昭和19年度から続いている伝統のある第64回農業技術功労者表彰を受賞された。今回、その功績内容も含めてまとめていただいた。

因みに農業技術功労者表彰のこれまでの受賞者は、累計で362名を数える。そのうちサツマイモ関係者は、8名（「沖縄100号」育成の松永高元、黒斑病防除法確立の五島和男・鋤塚喜久治、「農林1号」育成の小野田正利、電熱育苗・貯蔵法研究の松原茂樹、甘藷圧搾加工法開発の志村玄一、「高系14号」育成の濱田有年、甘藷澱粉製造合理化・廃水処理の山村穎）である。一方、ジャガイモ関係者は、3名（「紅丸」育成の宮澤春水、「ウンゼン」育成の宮本健太郎、暖地バレイショ品種育成・育種技術開発の小村国則）が受賞されている。

また、鹿児島県沖永良部島の早植えジャガイモは、農業改良普及組織などの支援もあって、近年急速に主産地形成が進んでいる。その状況と今後の方向を、上川信雄・前野陽一の両氏に寄稿願った。

◇昨年12月に開催された「ポテトフォーラム2008」で報告のあった中から、2件寄稿をお願いした。浅川芳裕氏からは、ジャガイモの世界動向から見たわが国の近未来戦略を、様々な角度から検証し提案いただく。これを1つの素材としてジャガイモ戦略の議論が深まれば幸いである。

遠藤千絵氏からは、「ジャガイモは生きている」という観点から、細胞レベルでの生理化学的な興味深い話題を提供いただいた。

◇西尾敏彦氏の「イモの技術誌」は、第3回まで進む。今回の話題は「ジャガイモ文化の伝導者であった梅村芳樹」である。梅村氏のイモ人生を、研究者ならではの暖かい眼差しで語られており、大変興味深い内容となっている。私事になるが、平成6年7月21日、出張の途中で島松のばれいしょ育種研究室を訪れた。インカ系の蒸かしイモを試食しながら、梅村さんとの楽しいイモ談義は、今も深く心に残っている。

◇企業の商品化情報では、「唐芋レアケーキ」で、新しいサツマイモの加工領域を開発・拡大されているフェスティバロ社代表の郷原茂樹氏に寄稿いただいた。鹿児島の風土を愛し、新鮮かつグローバルな感覚と理念で唐芋の新製品に取り組んでおられる様子が伺える。その内容は、読者の皆様にサツマイモ振興に関して、多くのヒントを提供いただいたように思う。

（狩谷 昭男）